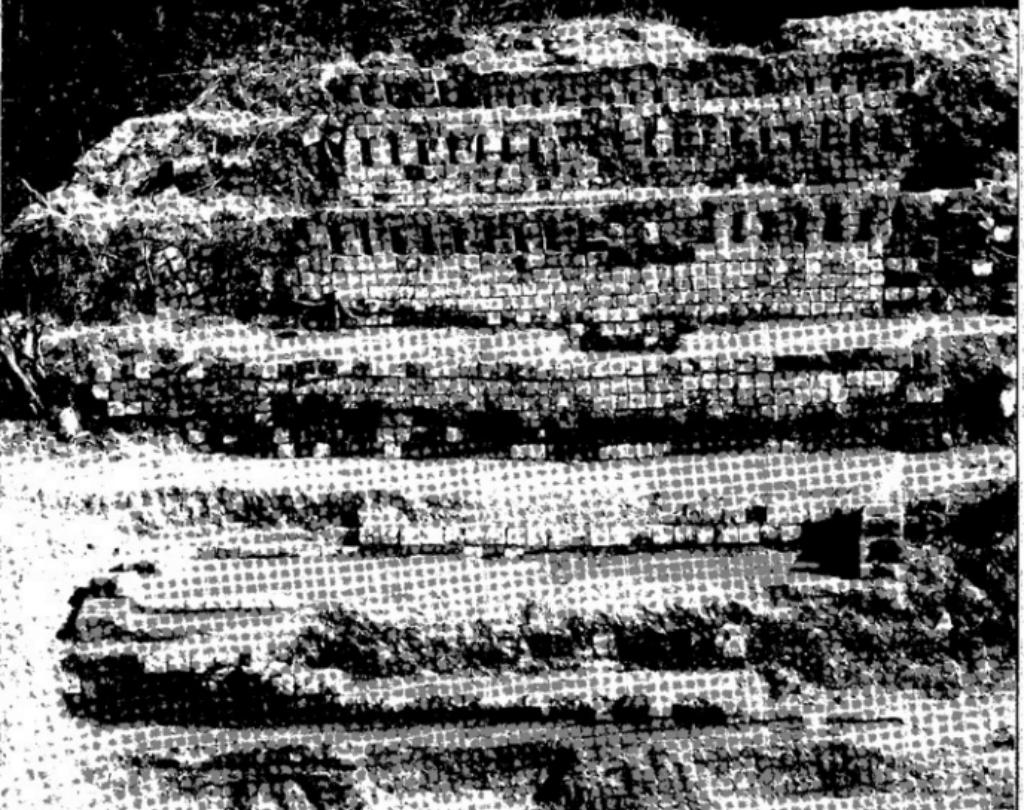


高知城
天守閣



昭和56年9月30日

高知市教育委員会

写真解説

- 1, 2 茶碗蓋 吳須繪 市王山名
3, 4 平 盆 色繪金彩 天地九谷翁銘
5, 6 仏 具 色繪金彩 台座破損
7 杯(盃) 色 繪

題字 間崎六泉

はじめに

高知市には、約90カ所の埋蔵文化財包蔵地が知られていますが、城跡・寺院跡等を除けばそのほとんどは、繩文・弥生・古墳時代のもので、おもに周辺部に点在しています。これまで考古学的調査を実施したのはこの種の遺跡でした。

今回調査した遺跡は、明治初期の窯跡であり、県下ではじめての近代遺跡の本格的な発掘調査となりました。

本文に詳述されますが、この窯は從来陶芸研究家の間で「幻の窯」といわれ、その製品は「幻の鹿児焼」と称せられておりました。今回の調査の結果、窯の大要が明確になり、また多量の出土遺物によって、その規模・陣容は中四国最大のもので、その製品は当時の日本の第一線レベルに近づいていたことが判明しました。

明治5年頃といえば、郭中に土民雜居が許され、乗物では人力車が移入される、油一揆が起きる、征韓論に破れ板垣退助が参議を辞すといった激動の時代でした。

その時期に、当時片田舎であった大津鹿児の地で、郷土の先達が日本の陶界レベルを追い越さんばかりの情熱を傾けたことに注目したいと思います。

今回の調査は、宅地造成に伴なう緊急発掘調査で、記録保存のために本書を作成しました。先達の遺跡をそのまま全て伝えることは困難であるとしても、専門的に調査・記録されたこの内容が窯業史研究等の資料として大いに活用されることを念しております。

現地調査及び、本書作成にあたってご協力いただいた岡本健児、伊東正統、宅間一之、山本哲也の諸先生をはじめ、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和56年9月30日

高知市教育長 山本 準一

例　　言

1. 本概報は、宅地造成工事に伴い、高知市教育委員会が実施した鹿児焼窯の緊急発掘調査の概要である。
2. 調査にあたっては「高知市鹿児焼窯跡発掘調査委員会」が組織された。本会は高知県教育委員会・高知市教育委員会・学識経験者・発掘地所有者・高知県陶芸会・高知県陶芸作家協会及び本会の主旨に賛同する人々をもって構成され、役員は次の通りである。

委員長 岡本健児（高知女子大学教授）

副委員長 伊東正統（元高知工専教授）

事務局長 山本修三（高知市教委社会教育課長）

発掘調査員 岡本健児（委員長）

伊東正統（副委員長）

宅間一之（高知県教委文化振興課社会教育主事）

山本哲也（高知県教委文化振興課主事）

補助協力員 城内保夫（土地所有者）

山崎勝徳（創業者子孫）

下村季男（創業者子孫）

川島憲雄（高知県陶芸会）

潮田文明（高知県陶芸作家協会）

3. 発掘調査は、昭和54年10月22日から28日まで実施し、以後出土遺物の整理は伊東正統があたり作業を完了した。

4. 本概報の編集は宅間一之が担当し、執筆は、1.2.3. は宅間が4. は岡本が5.6. は伊東があたった。測量製図は山本、写真は宅間がそれぞれ担当した。

5. 発掘調査の事務は、高知市教育委員会社会教育課、山本修三・川村行宏・江口浩・西田幸人・町田尚敬・深田信秀があたり、調査協力者として鈴木省一・濱栄子・山添その子・和食美紀子・戸田志津・山添朝子・細木由江・杉村輝子・野中千尋・土肥皆子・高橋常子・田所幸治エ・山添長男の諸氏の協力を得た。

6. 本概報の出土遺物については、発掘調査後の宅地造成工事中に発見されたものについても若干触れている。



1



2



3



4



5



6



7

目 次

はじめに	
例 言	
1. 序	2
2. 鹿児焼窯跡の位置と環境	5
3. 調査にいたる経過	7
4. 窯の構造と遺構	8
(1) 窯調査の概要	8
(2) 窯の遺構	8
(3) 第2焼成室	12
(4) 第6焼成室	15
(5) 4のむすび	15
5. 出土遺物	17
6. 鹿児焼をめぐる若干の問題点	25

1. 序

高知県の周知の埋蔵文化財包蔵地はおよそ800個所ある。さらにそれは年をおって次第に増加しつつあるが、反面開発の波に消されていく遺跡も少なくない。

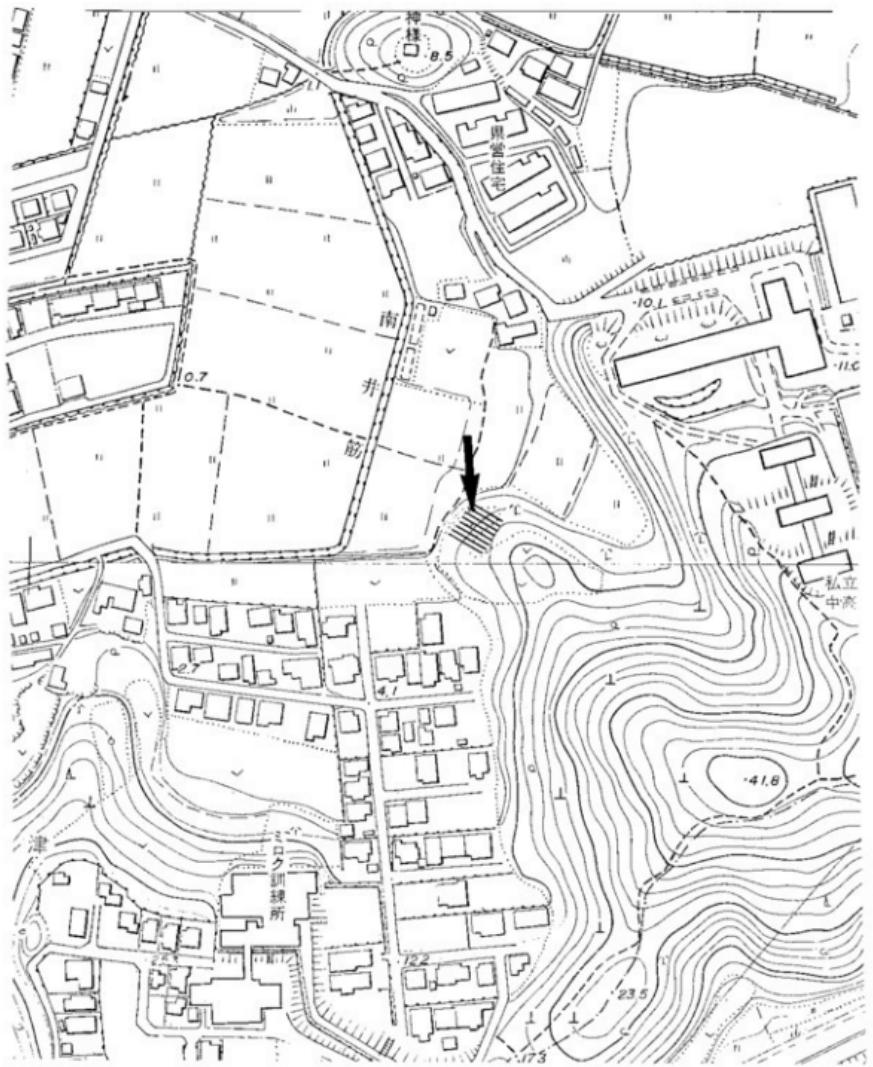
本県においても、近年おこなわれる発掘調査の大半が、開発工事等に伴う緊急発掘調査であり、その保護体制や緊急発掘調査のあり方について検討を加える必要がせまってきている。

今回緊急発掘調査を実施した鹿児焼窯跡も、宅地造成に伴う緊急発掘調査であり、開発と共に急速に進んでいる本県考古学にとっては、手ばなしで喜ぶべきでない問題を含んでいるかも知れないが、本発掘調査がその発展史に新たな1頁を加えたことは事実である。

本県における本格的な考古学的発掘調査は、昭和24年に実施された「宿毛貝塚」の発掘にはじまり、その後数多くの発掘調査が関係者の献身的努力によっておこなわれ、學問的成果を着実にあげてきた。しかしそれら調査された遺跡は、ほとんど年代からみて、繩文・弥生・古墳期のものであり、また一般にも考古学の分野はこの時代の遺跡研究の學問と理解されてきた。しかし、最近急速に歴史時代の考古学的調査が注目され、その重要性が認識されはじめた。本県においても、古代土佐の中心国衙跡や、中世集落跡や山城、さらに近世遺構の考古学的調査が実施され、報告書や市町村史にその成果が発表され大きな関心がよせられている。しかし、今回調査の対象となった鹿児焼窯跡は、従来調査された時代よりさらに時代がさがった明治初年、即ち近代遺構の考古学的発掘調査であった。そしてその調査により、従来陶芸研究者の間で「幻の窯」とされてきた本窯の大要が明確にされたことは、本発掘調査の成功を意味し、本県考古学の分野における近代考古学の出発点としてそのもつ意義はきわめて大きいものと考えられる。



第1図 鹿児周辺図



第2図 鹿児焼窯跡周辺図

2. 鹿児焼窯跡の位置と環境

本窯は高知市大津乙石ケ元339-1・130番地の通称「カラツ山」とよばれているところに所在する。(第1図・第2図)土佐電気鉄道後免線の電停「鹿児」から東方約500mの地点で^(註1)あり、私立中央高等学校西隣の丘陵舌部である。

本地区は歴史的にも本県の先進地帯とされ、本窯跡の背後にある高間原山には「高間原古墳群」がひかえ、和名抄にも「大角、於保都」として登場している。さらに古代土佐国府の外港として著名である紀貫之舟出の地「舟戸」も近い。また国分川の沖積作用による海退現象が次第にすすみ、秀吉に破れた長宗我部元親がその直領増加策として千石、塩田築成の中心舞台となった臨海地帯が前方に大きくひろがっているなどその歴史的風土には恵まれた地域である。しかし最近においては、高知市に近接していることもある、山は崩され、田園は埋められ、河川は改修され、新築家屋は日ごとに増加の一途をたどり、本窯の所在するカラツ山も「鹿児の電車停留所から東を見ると、山の端にただ1つ藁葺小屋のみえるところ」と説明された時代は全く想像できない。^(註2)

鹿児焼及び窯について詳細に伝える資料はないが、伝えられるところでは、明治維新後、県から2,000円の補助金をうけ、それに高須の下村小源太や、大津鹿児の山崎七平徳らが出資し、下村武弥、山崎七平徳らが共同経営にあたったとされている。原料は九州天草からとりよせ、阿波や北九州から来た従業員もふくめ80人もの人々が働く盛況の時期もあったようである。「子供の時からカラツ山へ遊びに行ったことですが、窯が三段になっていました。それに西向きの窯がだんだんに四つか五つありました。タキ口は南側にあったように覚えています。なかなか土地が広くて、二反以上もあったでしょう。ソギ葺のざつとした建物でしたがウンと高いものが上へ上へと建っていました。下の端の南側にショタイ場がありました。カラツを焼く型で丸いものや長いもの、平たいもの大きいもの、小さいものなどどっさりありました。石焼で原料はよそからきたようです。サアチ、小皿、ドンブリ、ハンドそのほか磁器も陶器もそうとう作っていたようです。カラツを焼くには焼いたが、あまり売れないでやまつたでしょう。何分職人が1日米を1俵食つたといいますからやりきれなくなりましたろう」という古老の話も本窯究明のための貴重なものであろう。^(註3)

また「鹿児焼」の名称はその地名に由来することは言うまでもないが、地名「かこ」の

文字については「鹿児」「加古」の字があてられ、おのづから焼物の名称にも影響を与えている。地名「かこ」について、「長宗我部地検帳」の「土州長岡郡大津郷下分地検帳」^(註4)には「カコ、前丸山ノ北」「カコノハナ」などすべてが片仮名で記されている。鹿持雅澄は、土佐日記の「かこのさきといふところ……」の解説に「鹿児崎ハ大津ノ西端ニアリ、今ハ潮渦退テ、ココヨリ二三丁バカリ西ノ方、葛島ト言處に提ヲ策キテ、オシナベタル田地トナレリ、マコトニコノアタリ、入海ナリシ時ニハ、往米ノ船ノ磯辺ニ泊テ船カカリスベク、磯ニ下リ居テソブベキ處ナリ」と「鹿児」の字をあて、当時の鹿児地区を説明している。しかるに『土佐州郡志』^(註5)では、「大津郷、東限篠原西限高須南限介良妙見北限布師田中島東西四十町許其土砂土、田部島本村北小村戸九七十二、北浦、土之村、加古山在加古村後 丸山在加古村 加古東山在加古村 高間之原在加古東山」等すべて「加古」の文字で尽されている。今次発掘で発見された円柱状焼台に「大津郷鹿児邑」刻銘のものもあったが、それをもって「鹿児」が正当とは決したい。徳弘勝氏は、「カは捐（かじ）取りのカ、コは人の意、書紀に凡て水手を鹿子と曰ふことを蓋し始め是時に起れり、航海神の住吉明神を祭神とする鹿児神社の周辺」という説明を最後に紹介しておこう。

註

- 橋詰延寿氏は『大津村史』の「鹿児焼」の項で、窯の所在地を小字「イタイ崎」としている。長宗我部地検帳には「板井崎・イタイサキ」のホノギがあり、それと隣接して「石ノモト」のホノギも記載されている。
- 『大津村史』「第六篇大津雜記中の鹿児焼・橋詰延寿著の分」昭和33年1月、大津村史
- 前掲著書中、鹿児工場のこと、山地洋次（82才）山地猪之助（77才）山地勝（57才）の三氏の話の聞き書きとしている。
- 慶長2年2月18日実施
- 鹿持雅澄『土佐日記地理弁』安政4年丁巳2月20日
- 緒方宗哲編、元禄期、土佐の官撰風土記とされている。
- 徳弘勝『土佐の地名』昭和51年10月 土佐史談会

3. 調査にいたる経過

本窯発掘調査の発端は、昭和54年8月上旬、高知市教育委員会に、鹿児焼窯跡周辺に宅地造成の計画があり、窯も除去される可能性があるとの通知が地元からよせられた。鹿児焼については前述のように明治初年に創業され、一時期かなりの盛況を呈したが、間もなく廃窯し、その後窯は放置されたままであったが、製品は陶芸研究者の間では「幻の鹿児焼」と珍重されてきた。従って高知市教育委員会は本窯の重要性を認め、造成工事の計画と、その工事の窯への影響の調査を開始した。昭和54年8月10日、岡本健児（高知女子大学教授）伊東正統（元高知工専教授）潮田文明（高知県陶芸作家協会理事長）山本哲也（高知県教育委員会文化振興課主事）の諸氏が高知市教育委員会社会教育課山本課長、川村係長、江口主事らと共に現地においてその工事予定と窯の確認調査を実施した。その結果、窯の造構は相当鮮明に残存しているが、造成工事により完全に除去されることが確実であることを確認した。本県における磁器物生産最後の窯でもあり、能茶山磁器との関係や本県窯業史研究のために重要な造構であるとの認識にたって保存のための協議にはいった。しかし、昭和54年9月20日付で、地主より本窯をふくむ周辺1,151m²にわたる土木工事のための発掘届が提出された。高知市教育委員会では、貴重な造構の消滅に際し、緊急発掘調査による記録保存の方針を決定、窯部分約300m²にわたる調査の計画にはいった。

昭和54年10月9日、「高知市鹿児焼窯跡の発掘調査を行い、郷土の文化財保護のために寄与する」ことを目的とし「高知市鹿児焼窯跡発掘調査委員会」が組織された。その後発掘の具体的準備がすすめられ、昭和54年10月22日から現地調査が実施され、28日大きな成果をあげて完了した。

4. 窯の構造と遺構

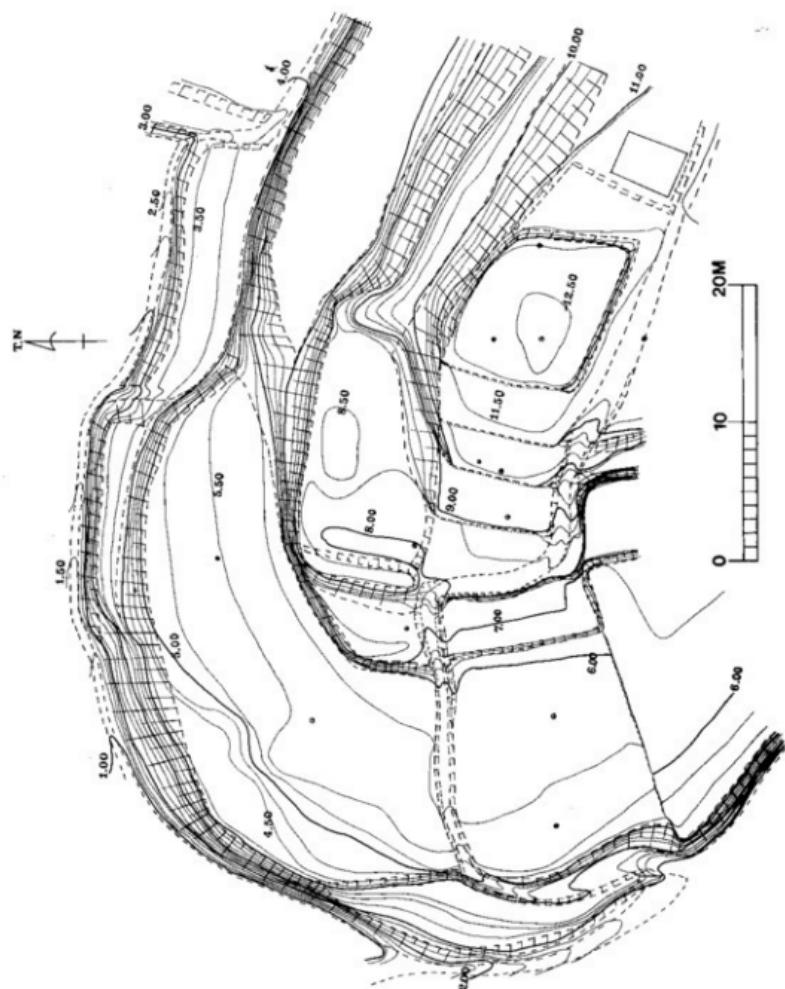
(1) 窯跡調査の概要 発掘前の窯跡は6段の段畝状をなしていたが、荒蕪地で雑草が生い茂っていた。その最下段部には山道が横切り、それは窯跡の南側を通り、窯の東部にある墓地に通じていた。

窯の東にある墓地と窯尻とみられる盛土状の間によく磁器片が出土するという事を聞いていたので、まずこの地点に幅1m×長さ10mのトレンチを入れた。この結果多くの鹿児焼の陶磁器片および焼台をはじめとする窯道具がかなり出土した。(PL. 3) 特に今回の施児焼窯の発掘での多量の陶磁器片の大半は、この地点での発掘品である。この地点は一種の物原とみることもできるが、窯尻部に素焼のままの破損品・製品の破損品等を持ってきて粘土・灰などとともに放棄し、窯尻部の補強をねらったものとみられる。

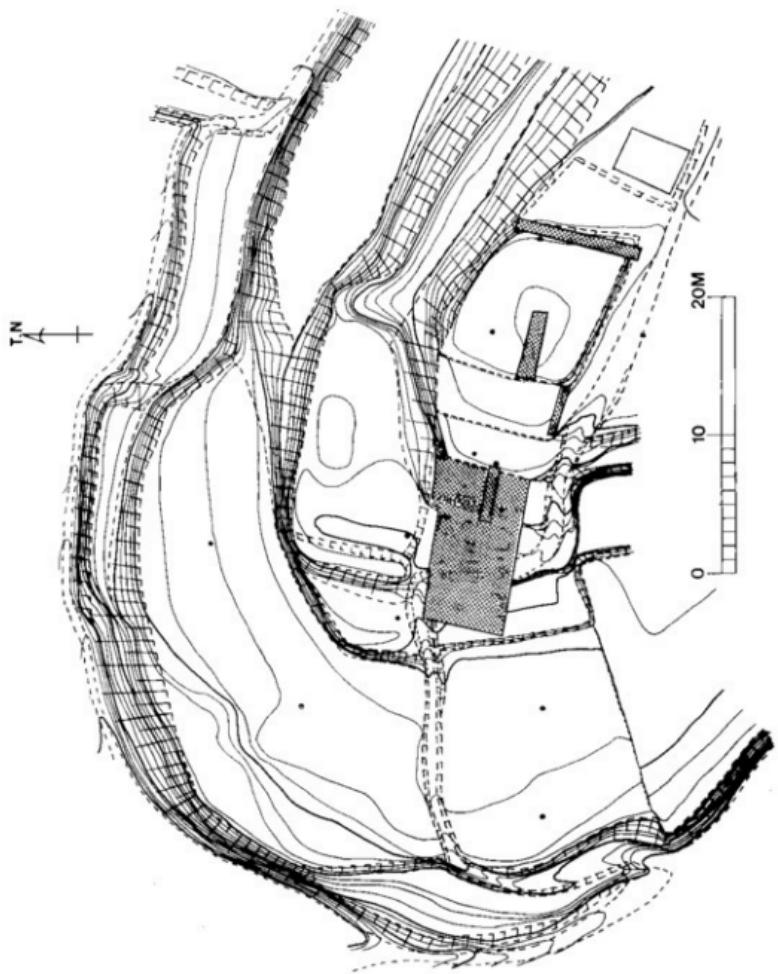
窯自体の調査は最も時間をかけて実施した。その結果発掘された窯は半地下式連房の8段8室の登り窯であることが判明した。(PL. 4) 発掘した窯については、(2)窯の遺構の項で詳述する。窯については第1室・第2室・第6室の残存状況がよく、これらについては完掘をした。第7室・第8室はトレンチ掘りで確認したが、その破損がはげしく残存状態が余りよくないので発掘はその1部にかぎった。各室よりはわずかであるが磁器片を少量発掘し、特に窯道具は第5室・第6室・第7室よりの出土が多くみられた。

物原の探索は第3図鹿児焼窯跡地形実測図に図示されている台地一円にわたって行ったが、残念ながら物原として確認でき得る地点はなかった。ただ窯の北西部の崖に多くの鹿児焼磁器片を表面採集することが多いことをみると、この方面に物原があり、すでに削平または水田下に存することも考えられる。この物原探索に関連して発見されたことは、たとえば窯の南部の山裾において、やや良質の粘土が発見され、陶土に使用してもよいものが発見されたことである。ただ、この陶土は量的にすくなく、かつ磁器製作にこの陶土だけの使用では不充分のものである。この場合注目すべきことは、陶土として使用可能の粘土が古生代ペルム紀の高岡層に存在することである。この鹿児焼窯のあるカラツ山も、また能茶山窯のある高知市能茶山も、最近個人として窯が造られた高知市大津高天原山も、さらにかつて高知市朝倉に開窯されていた山本貞彦氏の窯もすべてこの地質層に所属するものである。

(2) 窯の遺構 窯は焚口を持つ燃焼室と7室～8室に分けられた焼成室から成っている。



第3図 窟跡地形実測図



第4図 痕跡発掘調査範囲図

ただ燃焼室を7室～8室としたのは、この度検出された鹿児窯の第1室が焚口を持つ燃焼室に入るものの、焼成室の第1室かの区分が充分でないため、このような表現をとった。ゆえに検出された窯は8室に分けられるものである。各焼成室は階段状に各部屋ごとに上昇し、焚口（燃焼室）の1点とみられるP点から窯尻までの長さは28.5mである。窯の幅は第1室で4.7m、第2室で5.6m、そして第6室で#7.6mである。ただこの場合第6室に例を取ると、その幅7.6mというものは側壁を除外しての数値である。第6室は側壁の残存が充分であり、側壁をも入れての幅は10.3mとなる。このように窯の長さ28.5m、幅9～10m、そして8段8室の窯の規模は大きく、藩政末期から明治初年の磁器関係窯として、その容積は中・四国でも余り類例のない大きさとみられる。またこの窯の傾斜角は13.5°で、焚口とみられるところから最上段の第8室までの標高差は5.5mである。さらに第1室から第7室まで進むに従って、その床面積は徐々に大きくなるが、第7室と第8室の床面積は大きな違いがないようである。その場合第2室と第6室の床面積を比較すると、第6室は第2室の1.5倍である。

窯の天井部はすでに破損し原形を残さない。しかし第6室の側壁の状態から推測して、窯の断面は起伏のあるカマボコ状であったと想定してよからう。各室の床面は、ほぼ水平に調整されて遺存しているが、窯築造当時はこの調整のために、傾斜せる山丘の地表の一部を削平していることは各室の発掘によって検知することのできたものである。よって本窯は通称登窯ではあるが、本式にこれを呼ぶ場合は半地下式連房登窯と称すべきであろう。

発掘の結果、遺構として検出されたもので特に注目すべきものとして第6室の小口、(PL. 9, 10) 第2室～第7室におよぶ障壁、そして第6室・第7室の分焰柱などであろう。(PL. 10, 11, 12) 第6室の全面発掘によって小口は窯の南側にあいていた。この事からすべての各室の小口は窯の南側にあったとしてよいだろう。結局焼成に当つての窯入、窯詰をはじめとする一連の作業が、窯の南側から行われた事は当然である。またこれらの作業に滑車が使われた事を物語るように第5室からは窯道具類にまざつて滑車1点も発見されている。さらに言及しておきたい事は、窯道具が特に大量に出上しているのは第5室・第6室・第7室である。(PL. 7) そしてこれらの窯道具は第5室で十字状の焼台（天秤・てんびん）が多く、第6室では大形の円柱状の土柱が多く、第7室では小形のつづみ状の焼台、それに円板状の焼台が多かった。しかもそれらを各部屋に意識的に置いたようにあったので、あるいは廃窯される段階で各室にそれぞれ窯道具の種類に応じて列べ置いたものであろうか。窯道具などに混在して磁器片も各室から発見されているが、その量はすぐ

ない。それらのうち特に主要なものを挙げると、焚口とみられる付近から薄物の『幹山』の銘入りの磁片が発見され、第6室からは『有光市玉山』の銘入りの砧徳利(PL.40)が出土している。その他各室より磁片がみつかっている。また窯尻の部分から、多くの陶磁器片にまざって、べっこうの笄・毛染液の入っていたガラス容器等、開窯当時の陶工の使用品などもあった。

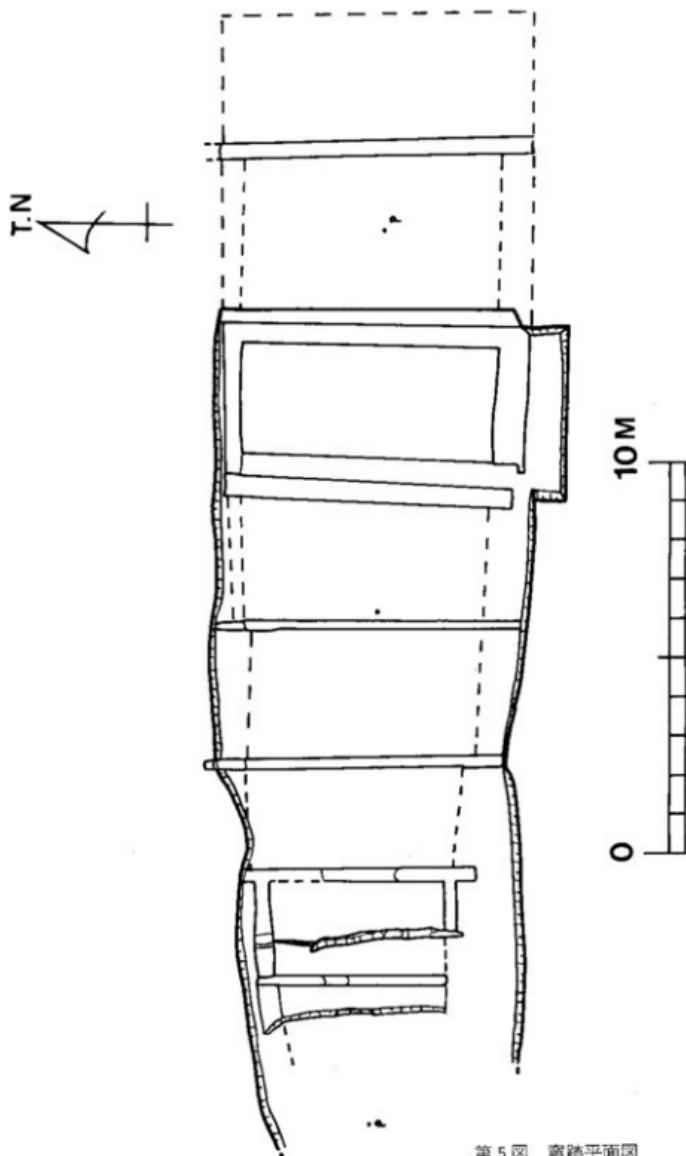
焚口は先述したように当初の形態を知るような遺構は、まったく発見されなかった。窯尻はこれも先にすこしふれたが、その攪乱がはげしく発掘を見あわした。というのは第7室においても一段積みのブロックだけがごく1部にしか残存していない状況であるところから窯尻(第8室)は原形はまったくその形をどめないと察知したからである。ただ第7室のブロック面および床面は非常に真黒く煤けていた。

窯の遺構は側壁・分焰柱等、内部構造も外部構造も各部位にわたって、粗製粘土の焼成品であるブロックの並列・積み重ねでなされている。ブロックはバラスやスサを混ぜた粘土塊を焼成したもので、 $46.2\text{cm} \times 18.8\text{cm} \times 13.7\text{cm}$ の角柱状のものと $25.8\text{cm} \times 13.3\text{cm} \times 11.5\text{cm}$ の正方形に近いものとである。

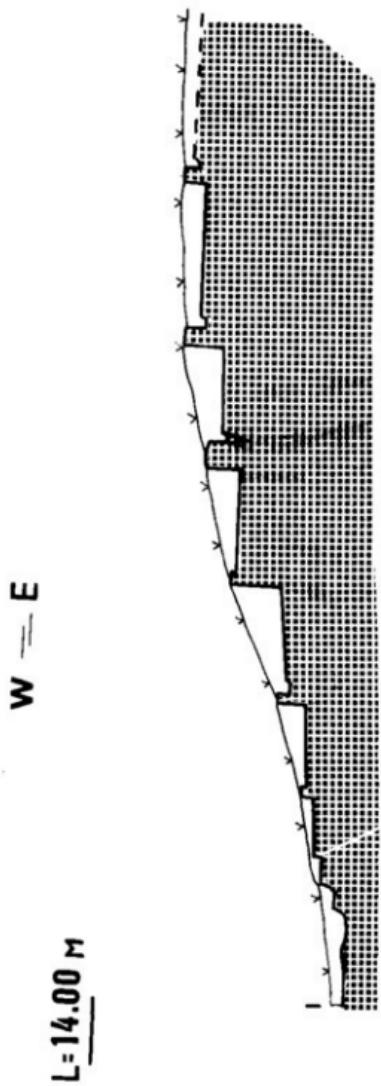
次に各焼成室で特に問題になる第2室と第6室については項を別にして詳述しよう。

(3) 第2焼成室(PL.5) 完全に全掘をなしたが、破損がはげしく良好な残存状況でなかった。障壁・側壁は大きく崩れ去って、1段~2段のブロックしか残っていない。また場所によってはブロックはまったく残らず、山の傾斜に段をつけた部分が露出した所もあった。第2焼成室の横幅は4.5m(先端)・4.6m(奥壁)そして縦幅は2.4mである。小口の部分と考えられる所が、側壁も大きくこわれ、なにも残っていない。この焼成室の中央部にブロックの列が1段~2段で横にみられるが、これについて非常に発掘の過程で疑問に思っていたが、高知市能茶山の陶芸家土居庄次氏がたまたま発掘を見学され、これは古い窯の残存だとの説明で難問が解けた。この点から考えて本窯は、一度築かれ、それを補修して再び第2の窯として再生したものと思われる。この点から考えても明治1けた代だけ榮えた窯することはできない。

第2焼成室でいま1つ注意すべきことは、側壁の1部が小刻みに段をつけていることである。(PL.5) 本室からは窯道具少々と素焼のままの破損品がすこし出土し、また発掘当初、表面採集といってよいものであるが、「かこせい」と銘を持つ紅猪口が発見されている。なお床面はほぼ水平に調整されて造存し、築造当初この調整のために、地表の一部が削平整備された状態を示して検出されている。また床面には2cm位の厚さで砂が全面に



第5図 痕跡平面図



第6図 窪跡断面図

まかれていた。

(4) 第6焼成室 (PL. 7~13) この焼成室については完掘をなした。各焼成室のなかでは最も残存状態の良好なものであった。発掘前から分焰柱の上部が露出していた。前・後の障壁・分焰柱の残りもよく、各ブロック（通称トンバリという）の残存も良好である。

第6焼成室の先端の横幅は6.5m、奥壁の横幅は6.6mである。これは内部の横幅で、両端のブロックおよび側壁のひかえを一切入れた横幅は先端部で9.8m、奥壁で10mである。また焼成室の縦幅は3.4mであり、奥壁の障壁の厚みを入れると4mになる。結局第2焼成室内部の広さは10.8m²、これに対し第6焼成室内部の広さは53.7m²である。第6焼成室は第2焼成室の約5倍ということになる。

小口の残存は非常に良好で、(PL. 9, 10) 小口の横幅7.4m、縦幅62cmである。入口はとくに小さくし、幅40cmで火入れ直前の小口閉塞を使っている。小口の部分は焼成室よりも10cm強低くしている。床面は窯の温度で焼けて、いわば漆喰状にかたくなっている。この床面上に厚さ2cm程の砂が一面に敷かれていることは第2焼成室とかわらない。

この室の障壁と分焰柱の残存は良好であった。(PL. 10, 11, 12) 障壁や分焰柱の1部に焼けた磁片が付着してあるのは印象的である。また分焰柱は側壁などに用いたブロックと同じものが使用されている。分焰柱の残った焼成室は第6室と第7室であるが、これは福岡県上野窯のように各焼成室にあったものか、それとも宮崎県延岡小峯窯址のように窯尻に近い第7・第8焼成室のみに存在したとも考えられる場合に近いのか、今後に問題を残すものである。本窯跡の場合も、窯尻に近い第6室と第7室のみに分焰柱を残している。このように窯尻に近い2室にだけ分焰柱を持つことについては、延岡小峯窯址の調査者鈴木重治氏は次のように記されている。

「窯尻に寄って、焼成床面積が急激に大きくなる部位に分焰柱を設けたことになり、火廻りを良くする為の構築と、焼成床面積の関係を暗示することになる。」^(註1)

本焼成室の最後に述べておきたいことは、北側の側壁が窯の方に傾斜せず、いわば北側に倒れたような状態にある。(PL. 13) これは本窯が廃窯となり放棄され、以後の地震等にあい窯自体が北側に向けて倒れかけていることを物語るものである。また本焼成室の奥壁・障壁と分焰柱はこまかくこれを観察すると、その中央部はその破損の状況はひどくないが、その左右の部分は1部にひびきおよび両端への傾斜等がみられ、(PL. 10, 12) これらの障壁、分焰柱が1時期に作られたものでないことを示すものでなかろうか。

(5) 4のむすび 1で述べられたように本窯跡の発掘は、窯の年代から近代考古学の分野

であり、筆者らにとっては近代考古学上の調査発掘は初めての事であった。そしてこの窯の大要が明確になったのは発掘調査として大成功であったといえる。なお本窯を歴史の面からみると、その開窯は明治5年ごろといわれる。これは維新後における武士の商工業への転身の一つと考えてよかろう。そして当時としては実に大きな窯を築いているが、そこに武士の商法的なものがみられる。その後、県から助成金をもらったという言い伝えがあるが、これはいわば国の殖産興業の一端を荷うようになったものと把握してよかろう。さらに明治20年頃廃窯になるのは、商業資本の発展につれて瀬戸等の大手に立ち向う事ができず、それに至ったのであろう。当時の四国の窯の1つである愛媛県砥部焼は販路を海外に求めることで活路を見出したが、鹿児焼はそれが出来ずに廃窯に至るのである。

註

- 1 鈴木重治・柳田純孝『延岡小峯窯址』1964
- 2 註1に同じ。なお本書を記すに当って註1の文献を多大に利用させてもらった。記して謝意を表したい。

5 出土遺物

発掘調査及びその後の宅地造成工事中に出土採取した遺物は数万点にのぼるが、そのなかで本窯製品として資料的価値が認められたものは下表の通り921点である。

出土遺物一覧表

	名 称	數 量	名 称	數 量	名 称	數 量	名 称	數 量
磁 器	茶 鍋	165	徳 利	16	花 器	15	香 爐	2
	同 盖	15	爛 筒	12	紅 猪 口	4	箸 立	2
	湯 吞	42	鉢	50	神 器	5	線 香 立	1
	杯 (盃)	45(42)	重 ね	9	仏器(具)	5	台	1
	平 盆	114	蓋 物	12	植 木 鉢	4	不 詳	3
	菊 盆	30	そば猪口	1	鳥 鮎 入	3	雜	5
	八 角 盆	21	土 瓶	7	人 形	4		
	大 盆	12	片 口	5	燈 明 具	2	小 計	609
陶 器	湯 吞	1	土 瓶	33	半 銅	1	香 合	1
	皿	4	片 口	13	台 盆	2	瓦	5
	杯 (盃)	3	甕	5	受 盆	1	土 型	1
	徳 利	6	壺	3	涼 爐	2	波 瓶	1
	蓋 物	3	摺 鉢	2	火 受	1		
	鉢	13	植 木 鉢	30	燈 明 具	2		
	行 平 鍋	12	鳥 鮎 入	4	行 火	1	小 計	150
窯 道 具	耐 火 燬 瓦	5	燒 台 円 板	18	天 秤	12		
	土 柱	21	〃 ハリ	15	雜	7		
	燒 台 堆 磨	40	〃 座 布 用	13	そ の 他	2(1)	小 計	132
其 他	瓦	7	ガ ラ ス	21	鐵 容 器	1	雜	1
							小 計	30
							總 計	921

焼成室からの出土は少量で、窯最上部の左右及び東側と、最下段北・西・南側から比較的多く出土した。このことは、本窯の場内が相当の広さをもち特定の物原をおかなかつたこと、最下段は閉窯後烟作転化の整地で、陶片が分散したためではないかと思われる。出土遺物のなかで磁片が多量に出土したことは、本窯操業の後半が磁器であったことと、磁器は陶器に比べ技術的に困難で失敗数も多いためであろう。焼成室内部から出土した磁器は、胎土、形態、染付ならびに釉などに共通点がみられる。陶石（天草）を主とする上質の磁器は透光性があり、磁器化の十分進んだものと不十分なものとがある。また、白色度は現在のものに比べやや劣り、幾分青味をおびたものが多い。磁器は、良質のものと同じ陶石に粘土を加え胎土を改良した硬質陶器との2種類に大別されよう。原土の調整は概して良好と見られる。磁器は無色の光沢ある釉がかけられ、灰釉（祚）のものも見られる。

焼成物は、「茶碗、角皿、擂鉢、扇皿、蓋付茶碗、皿など多く、四角大皿は牡丹の花の絵付に、周囲へ芭蕉の葉模様でとりかこむとあり、その他の記録によれば釉にきぬた徳利、大小皿鉢が多いとある。カコ銘は稀であり、カコセイ、市王山製、市王などの銘があった。また一部には皿鉢、小皿、ドンブリ、ハンドその他の磁器も、陶器も相当作られていた。」
(註1)となっている。

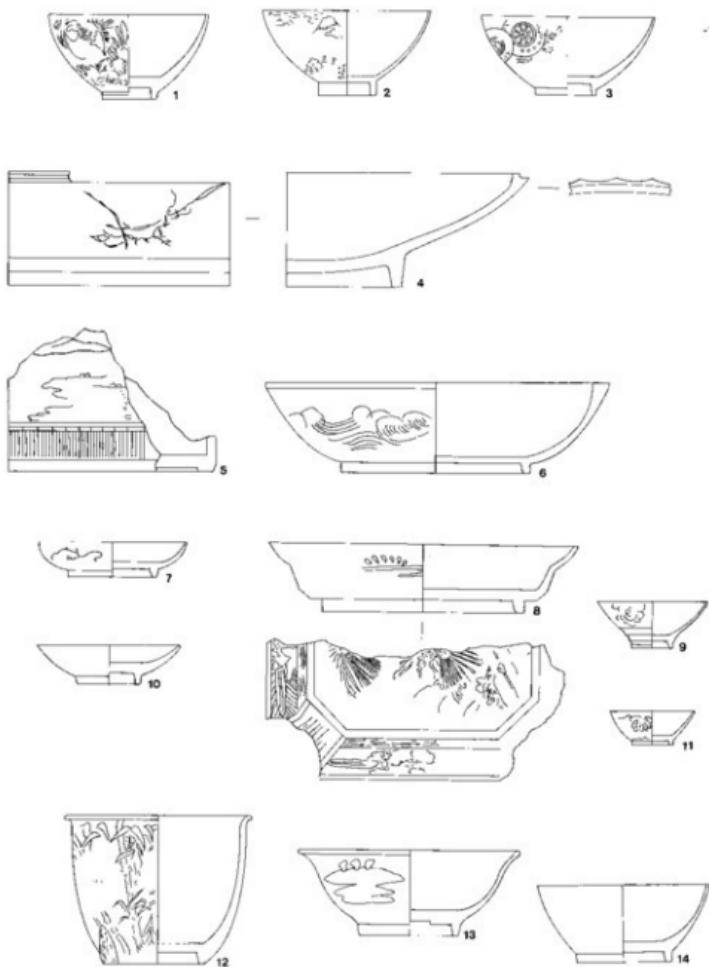
陶片からみた磁器は、茶碗、蓋付茶碗、大皿、皿（菊、平、八角、角）、湯呑、蓋付湯呑、湯冷まし、紅猪口、そば猪口、重ね、蓋物、同蓋、鉢、徳利、燗瓶、花器、植木鉢、片口、湯沸し、御神酒徳利、獅立、線香立、鳥餌入れ、台皿、人形、燈明具、雜など広範な日常雑器に及んでいる。これらの中なかで特に多いのは茶碗、皿（平一大、中、小、菊、八角、角）、鉢、湯呑、杯（盃）、徳利（燗瓶）、蓋物などである。

茶碗(第7図)(PL. 15~20)

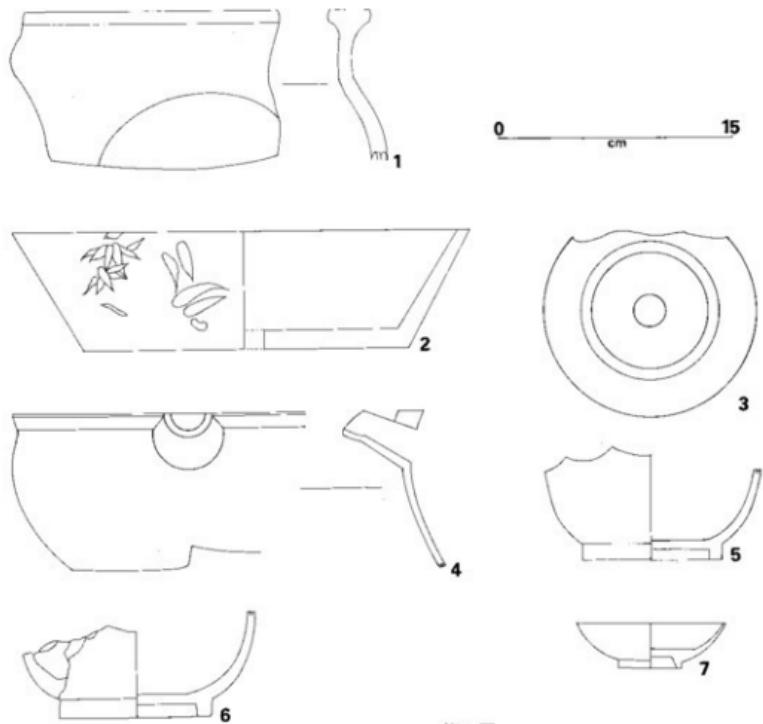
少數の素焼と無地が多い。口径10.0~12.0cmが大部分を占め、高さは5.5~5.7cmに集中している。これより小さいものは、汁碗とみられる。改良具須による染付が大部分で手描きである。窓絵が相当あるが、絵付で特筆すべきは芙蓉手を生かしたことであろう。その他には菊、蘭、牡丹など草花文、桜、梅、竹、笹、柳、椿、蝶、鳥、山水、富士、雲、亭など多彩であるが、赤と青、茶と青を配した新奇な格子模様などもみられ、変った面では中筋に種々の帆舟が数十種(PL. 20)もみられることである。

皿(PL. 21~27)

平皿、菊皿があり、前者は、大、中、小の各種と八角、角がある。素焼皿、無地、蠟抜きなどでいずれも完形品はない。大皿では、口径30cm以上のもの、素焼では50cmのものも



第7図



第8図

ある。なお中国の大皿のような丸フチの外側に2.1~2.4cm間隔に波形のトガリをもつものもみられる。帆舟は最も簡単な描き方で帆柱を略している。染付はすべて改良呉須により菊、牡丹など草花文、蝶、松と鶴、岩と蘭、また山水亭などがある。

菊皿は中、小の大きさで山水、富士と帆舟は1箇所に3舟が多い。皿は大きくなるほどその外側に唐草の変化したものを飾り、八角皿は周辺を4区分し大きく芙蓉手が用いられている。中央の絵付は山水、亭、松と梅花、竹と梅花、松竹、竹鶴、牡丹と蝶、草花と蘭、縁の周囲には窓絵がある。縁に銹釉を施したものもある。

杯（盃）（PL. 28）

口径は7.0cmと大きいものが多い。草花、山水などの絵付で、色は青錆あるいは茶かけ、青ぼかしや細字の漢詩もある。金彩の多いのは失敗を慮り、小物で金彩を試みたためであろう。

湯香（PL. 29）

煎茶用茶器などを含み、口径5.0~7.0cmに対し高さは3.0~6.3cmに及んでいる。呉須の染付が多く草花、山水、動物絵が多いのが人物、馬、竜、鳥、竹に雀、扇も數片みられる。また漢詩や和歌もあり、色絵のほか青緑色やこれらのぼかしもみられる。変った面では八角形とみられるものがあり、無地も比較的多い。

鉢（PL. 30、31）

径12~18cm迄のものが多く、草花、山水の染付が主で僅かに鳥と鯉がみられ、窓絵もある。

徳利・燭瓶（PL. 32）

徳利は佔徳利が主で、染付は青で山水・草花である。燭瓶は首周辺の飾りよりみて繊細で、絵付は転写への移行が強くみうけられる。

蓋物

口径6.0~11.0cmのもので呉須染付が全部にわたり、菊花をはじめ草花文が多いが、線画、鯉も一部にみられた。

以上のように鹿児窯の第一段階ともいべき改良呉須による染付は、先進陶業地のものに比べ多少の遅色はあるにしても一応の成功をみたといえる。本窯での新しい絵付をみると、呉須染付（主に手描きによる）を除いて色絵26.2%、転写17%、金彩6%である。このことは転写技術の開発が行なわれたことと、色絵も絵具使用が多くなったことを示すものであろう。

鹿児窯において注目すべきは、磁器については有田に学んだことは勿論であるが、特に有田より遅れて陶器から磁器に転じた瀬戸、京都、九谷、砥部、横浜など新興磁器の研究にあたったことである。転写については、転写に先鞭をつけた瀬戸の真陶園について調べ九谷、有田などを目標とするなど企画上優秀な人材が本窯にいたことを物語る。

また本窯が色絵を目指したのは明治11年と朱書した湯呑み陶片の発掘や、その他多数の陶片に赤が用いられていることや緑、黄、褐、黄茶、ピンク、えび茶、黒、橙、黒褐、淡紫、赤あるいはこれらの濃淡で描かれたものなど多彩にわたっていること及び、吹墨法によるぼかしや型絵法の採用などから判然する。

陶 器(第8図)(PL. 33, 34, 35)

陶器で日常雑器の陶片が少ないので前述のとおり失敗品、破損品の少なかったことを意味する。陶器には経験者も多く、陶工職人も容易に得られたし、製品需要も数多くあたったことは想像できる。植木鉢、土瓶類、片口、鉢類が多く、行平鍋、徳利、甕、鳥餌入れ、燈明具、壺、摺鉢、行火、台皿、涼炉及び火うけ、蓋、半銅(PL. 33)香合、漫瓶などが出土した。(PL. 33)

植木鉢には外側に籠で竹を彫ったもの、また釘によって草花文を描いたものがある。一部に焼けすぎたため鉢の周辺が変形したものもある。

土瓶は胴、底、腰部、注口、耳、蓋などがあり、十分焼成されたものと、柴焼で非常に軟弱なものがある。黒褐色、クリーム色、朱泥様のもの、赤色など鉛釉のものもみられる。

徳利には砧徳利(PL. 34)に呉須染付の芙蓉手がみられ、鶴を描いたものもある。半胴釉のかかった一升徳利、印入徳利もみられる。

甕は珍らしく底あげしたものがあり(図2)九州の亨和2年(1802)以前のものと類似している。

鳥の餌入れ(PL. 32)は、化粧がけの上に呉須絵付がある。

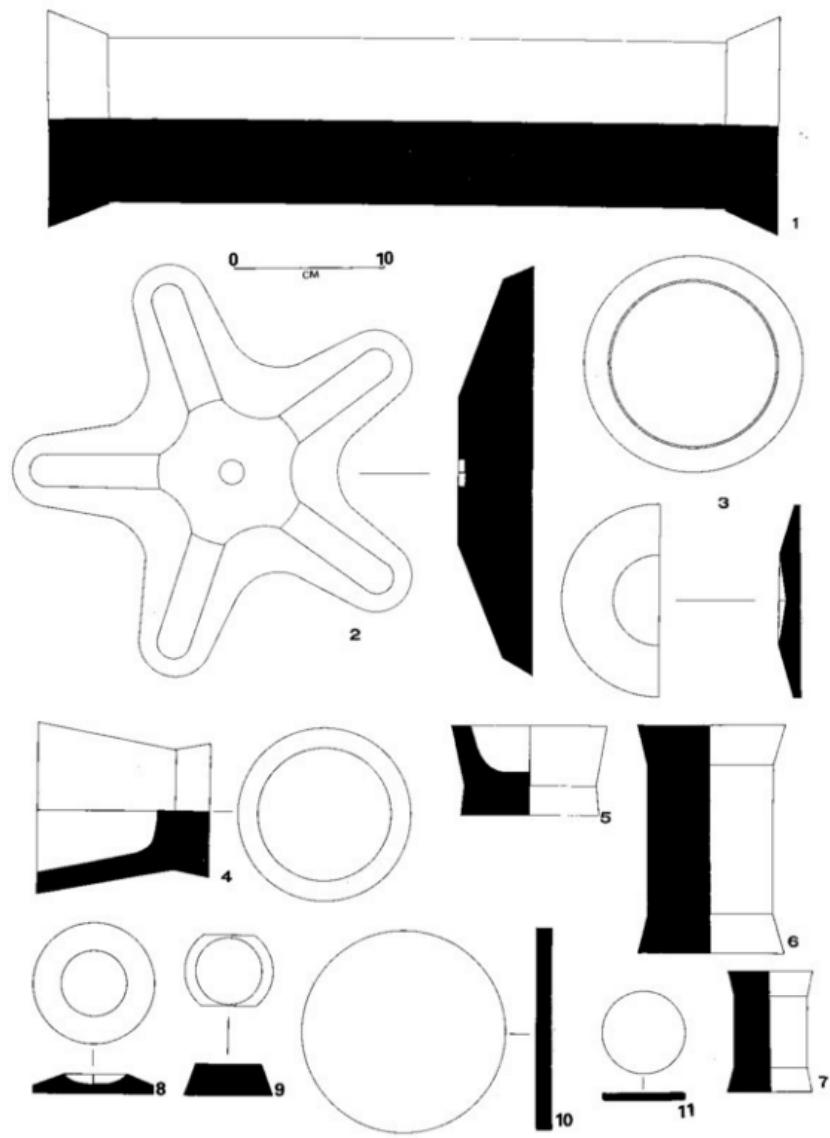
燈明具(PL. 32)は、上下に皿(径6.7~6.8cm程度、高さ4.7~5.0cm)があり、高さは4cmでやや低いものもある。黒褐色釉とクリーム色釉をかけたものもある。

摺鉢には普通のものと、白釉の口径30cm以上で外側に呉須による解読不可能な一字の外注品らしいものも発見された。

涼炉と火うけ(PL. 34)

涼炉は灰色釉がけで貫入と一部に緑釉のもの、火うけは無釉で久の銘がある。

窯道具(第9図)(PL. 36~39)



第9図

窯詰めに古い方法がとられており、天秤法が用いられたようで窯内で、完全品が多く発掘された。一部天秤に植木鉢の底部や皿、茶碗が溶着したものもある。

焼成は天秤窯によるもので、土柱は大小、数多く発掘したが、棚板の発見はできなかつた。天秤はやや小さいものが用いられており、3～6脚のものがあり（PL. 39）、1脚の長さ11.4～14.2cm程度のものである。土柱（ツク）（PL. 36）は大きなもので、長さ47.8～51.5cm、山崎の家紋や大津邑鹿児と彫りこんだものもある。次で21.5cm、7.8～10.0cm、5.0～6.6cmがあり、琳彫形の焼台（PL. 37）は外径10.0～11.4cm、内径6.6～6.8cmのものが多く、次で外径6.3～9.8cm、内径4.1～7.7cmである。前者には三つの印刻銘久、良・堂がある。大きさよりいえば高さが低く、口径の大きいものもあり、製品の複雑性を示している。円板型（PL. 38）のものは大きなもので外径14.8～15.2cm、中央の高さ2.4～2.8cm、クボミ部径5.7～6.2cmである。下敷（座布團）（PL. 39）は、径3.7～7.2cm、厚さ0.3～1.6cm、大きなもので径10.0～14.9cm、厚さ0.6～2.1cmに至る各種のものがある。ハリは径11.0～13.0cm、中厚1.0～1.6cm、中央くぼみ5.0～5.6cmで5本ハリが用いられている。小さいもので4.7～5.9cm、中央径1.6～4.9cm、同厚0.7～1.6cmと多岐にわたっている。

窯の側壁部に用いるのぞき穴部（PL. 39）が完全に発掘されたことは貴重なことである。成形型として菊皿用の石膏型や製薬用土型（PL. 34）も発掘した。

陶磁器及び窯道具以外の出土品は紋入瓦、普通瓦、煉瓦、ガラスなどである。ガラス製のものは、白濁色電気笠、透明、茶、青、紫色などの容器瓶、瓶栓などの破損品で、この中には目薬、しらが染容器などがある。またこの他に破損し、英文判読困難な鉄容器風のもの、鋸釘付セルロイド板片などもある。

註

- 1 山本貞彦・「陶説 高知県陶業史(3)異説能茶山焼」昭和44年10月 日本陶磁協会

6 鹿児焼をめぐる若干の問題点

鹿児窯に関する文献資料では、開窯については維新後、明治初年、明治5年、明治10年、閉窯については明治10年～15年などの諸説があるかいづれも短期間の操業としていることは共通している。

開窯については、本窯経営者の孫である山崎勝徳、下村季男氏らの話から明治5年(1972)頃を推定したい。しかも陶窯として発足し、同10年(1877)頃、高知県より下渡金2千円を受けて窯の拡張をはかり大窯に改良し磁器焼成をはじめた。この間窯は明治11年の年次入りの陶器湯呑を発掘したところから明治12年(1879)に本格的に磁器へ進んだとも考えられる。当初の陶窯は焚口周辺部の床面に、その一部を発見することができた。10年の年次入磁器(八角皿)の現在品があるが、これは初期製品とみられる。閉窯は諸状勢から判断しなければならないが、明治20年(1887)とした。これは経営者の一人下村小源太の長男鷗(ショウ)太郎は絵付をしていたが、本窯閉窯後、明治20年(1887)幡多へ写生の旅にてたと、伝えられることなどからである。

経営者についても文献上では不明であるが本窯は共同経営であり、当初は大津村鹿児の山崎七平徳と高須の下村小源太とされているが、七平徳は明治9年(1876)死去し、長男徳樹がこれをついている。

能茶山藩窯は短命に終ったとはいえ50年にわたるが、この能茶山と鹿児との間に陶磁器に関する陶工たちの往来がどの程度であったか、明らかではない。ただ磁器閉窯後、明治4年～同11年迄空白があることから、一部の著名陶工、職人を含め各地に散逸した者が多いたと考えられる。特に絵師などは転職したという。能茶山にあった西和田久三郎は明治17年(1884)幡多芳奈の山崎窯へ赴き、間もなく帰能後、本窯へ参加したもので、一連の涼炉の桜の花わくに久の字の銘があり、また窯道具焼台に久の字の銘が多数ある。能茶山の森田窯にあった川谷良太も参加しており、窯道具焼台に良の字の銘が多く残っている。また堂の字の銘もある。

陶工銘は、市王山が最も多く、茶碗の蓋、砧徳利、八角皿などにわたっているところから、主要陶工であったことがわかる。発見された陶工名は延べ28名に及ぶが、22名が他窯の陶工である。

勿論本窯の主陶工としては有田より米庵の市王山(有光姓)がある。他に瀬戸より来鹿

と伝えられるものもあるが、これは恐らく砥部を意味し、陶工銘愛山（向井和平）に指導を仰ぎ、また推せんを得た職人が砥部堂成窯より来鹿し、前記の窯道具に堂の銘を残したものではなかろうか。ともかく鹿児焼は、製陶技術の研究に、他窯の陶技を積極的に取り入れようと努力したことがわかる。しかしこれらの陶工たちの来鹿についてはこれを証するものはない。また色絵の陶片の一部に、天地九谷翁製造と金字で書かれたものを発見した。皿、茶碗など一連の色絵陶片の中には九谷系を手本としたこともわかる。

鹿児をあらわす窯銘としては仮名書が多いが、鹿児を明示したものもあり、一部の文献に使用の加古^(註1)の字は発見できなかった。

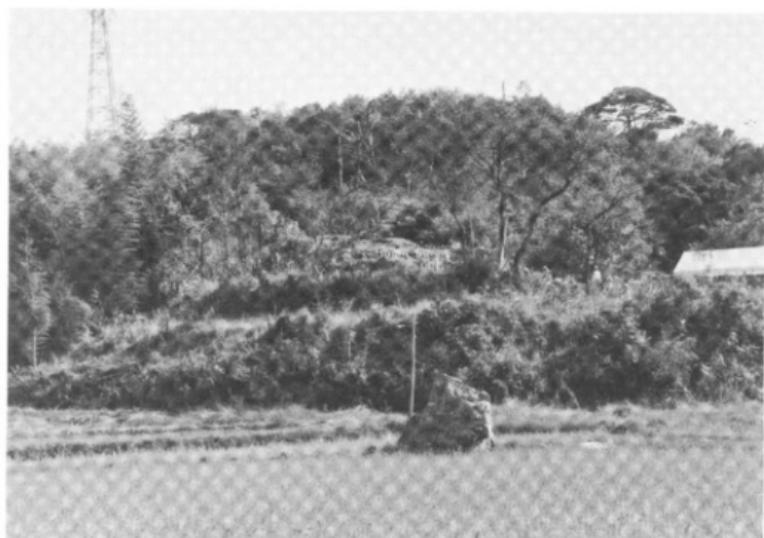
本県の陶業は特に盛んであったというわけではないが、今日まで開窯された窯は49窯に達する。この中で59%にあたる29窯が明治期のもので、ほぼ全県にわたるが、ほとんど短命に終っている。長く継続して焼かれた大窯は能茶山の陶窯西和田窯であり、明治期末四国一と称せられた。これに一步先んじて、四国最大の磁器窯鹿児窯が生れていたことは、銘記すべきであろう。

今回の鹿児窯の調査にあたって御教示と助言を受けた土居庄次氏に心からの感謝の意を表する。

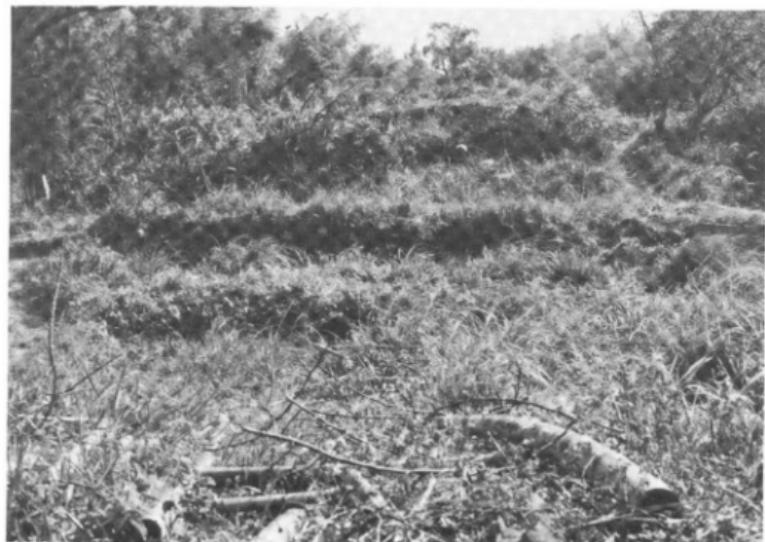
註

- 1 小野賢一郎・「日本陶窯史尾戸焼上巻」—昭和7年12月—陶器全集刊行会

図 版



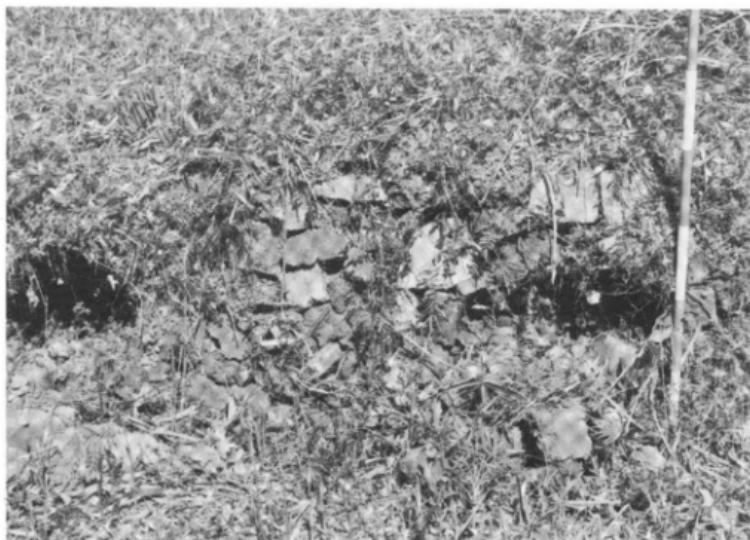
鹿児焼窯跡遠景、通称カラツ山



発掘前の全景



窯跡背後（窯尻上方）より鹿児大津地区をのぞむ



発掘前の窯尻



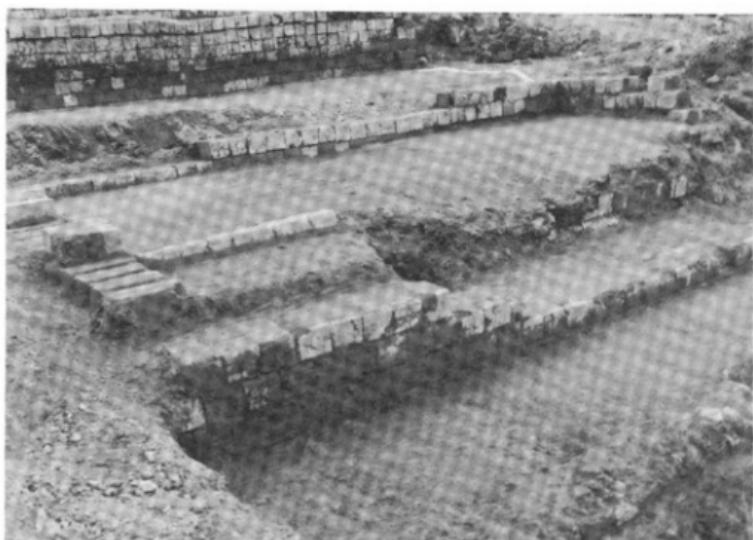
窯尻部分のトレンチ



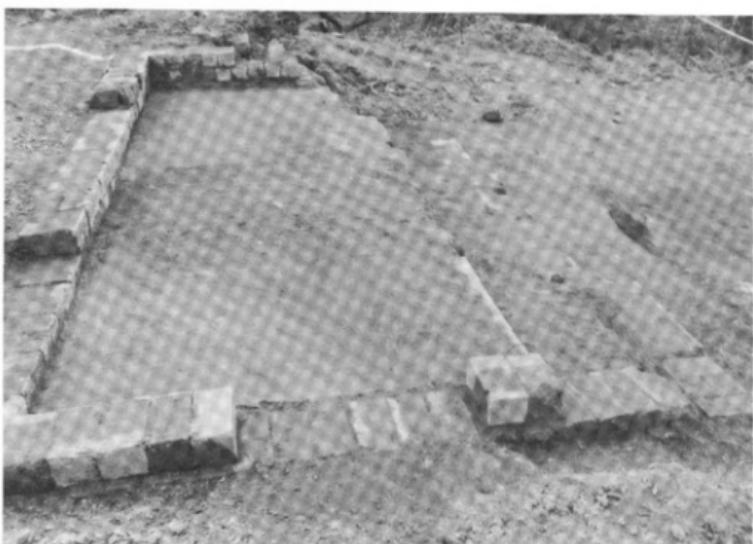
窯尻部遺物出土状況



鹿兒燒窯全景



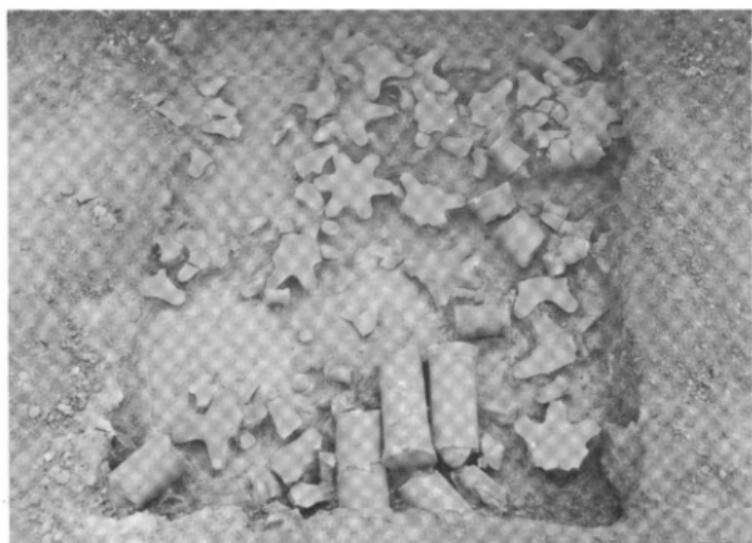
第2焼成室周辺 北より



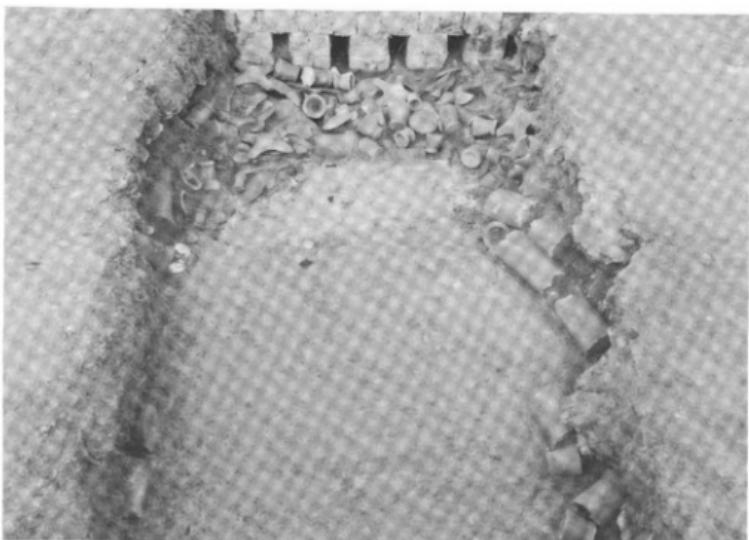
第2焼成室周辺 北上部より



第5燒成室



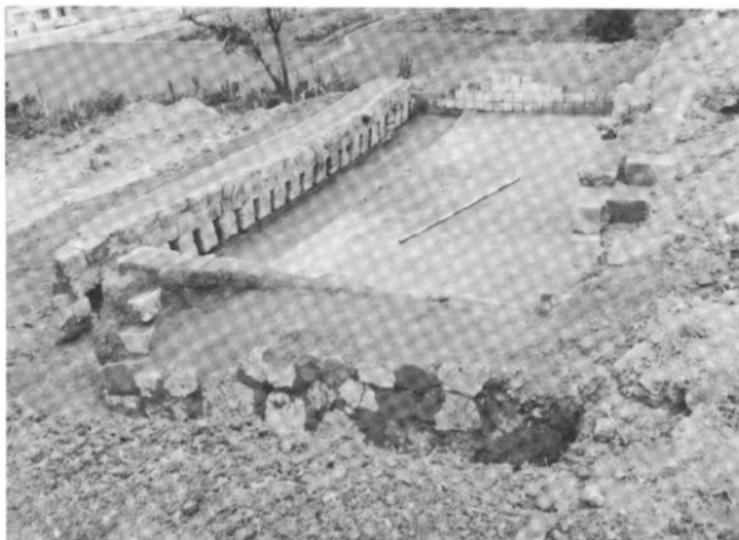
第5燒成室窯道具出土状况



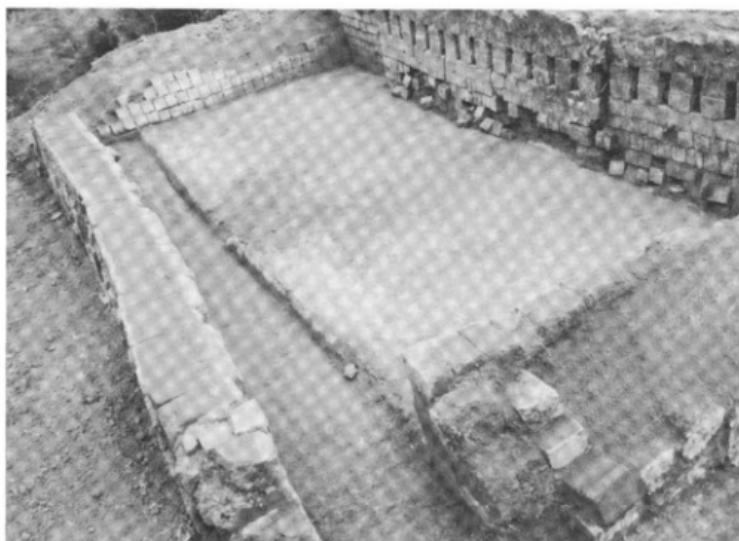
第6焼成室トレンチ



第6焼成室窯道具出土状況



第6焼成室、南後方上部より



第6焼成室、南上方部より



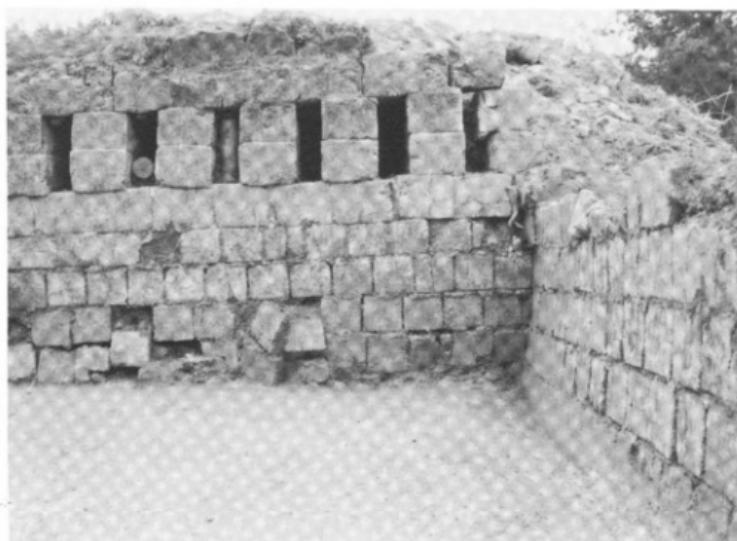
第6焼成室小口部 1 西方より



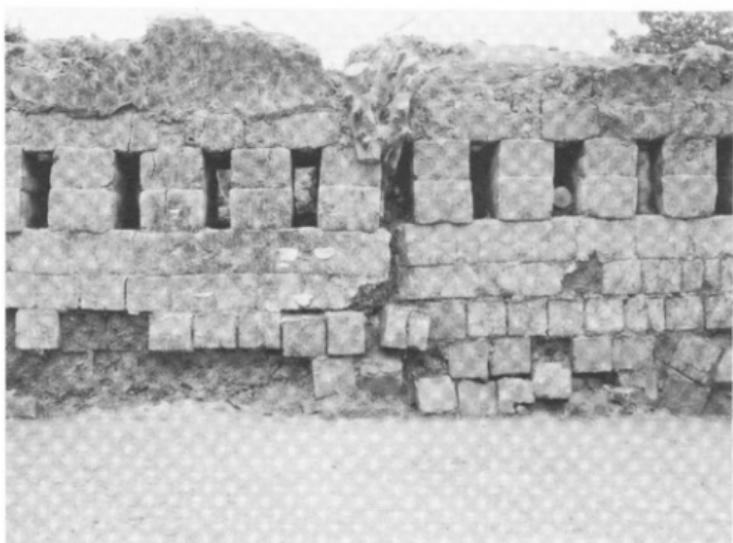
第6焼成室小口部 2 南方より



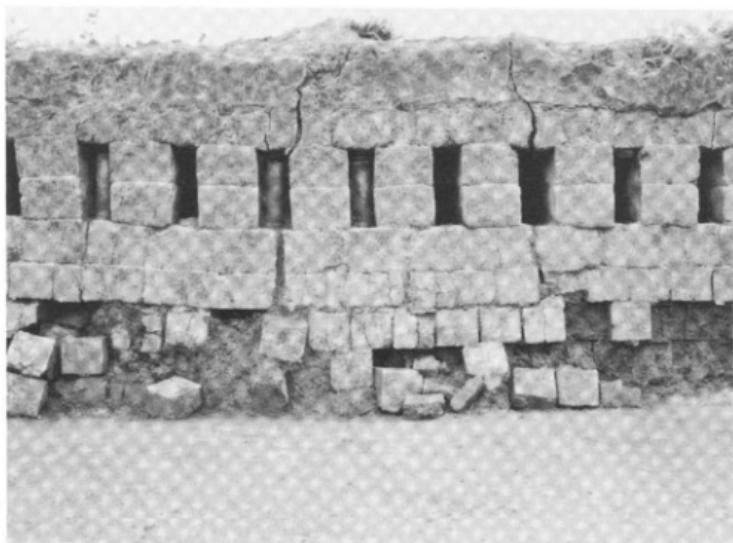
第6 焼成室小口部より焼成堂



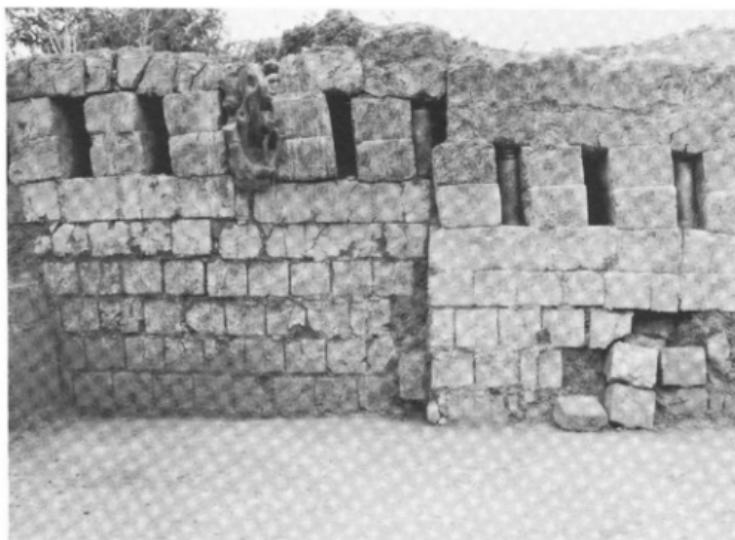
第6 焼成室障壁及び分焰柱、南端部



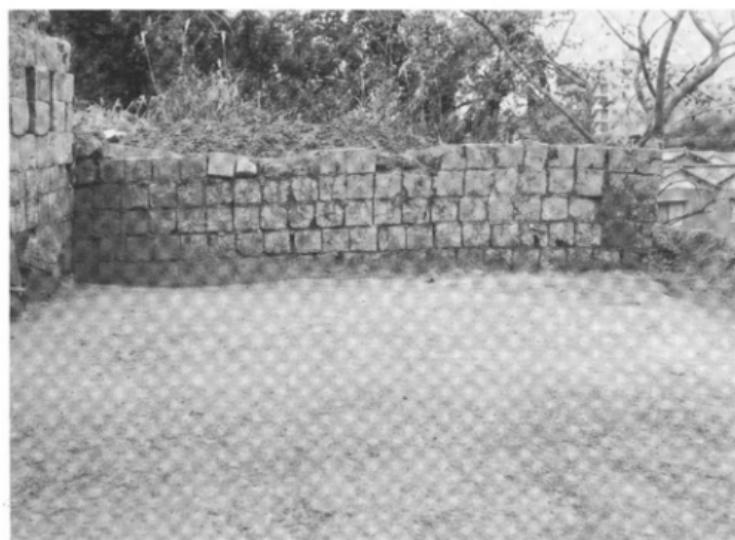
第6 焼成室障壁及び分焰柱、中央部 1



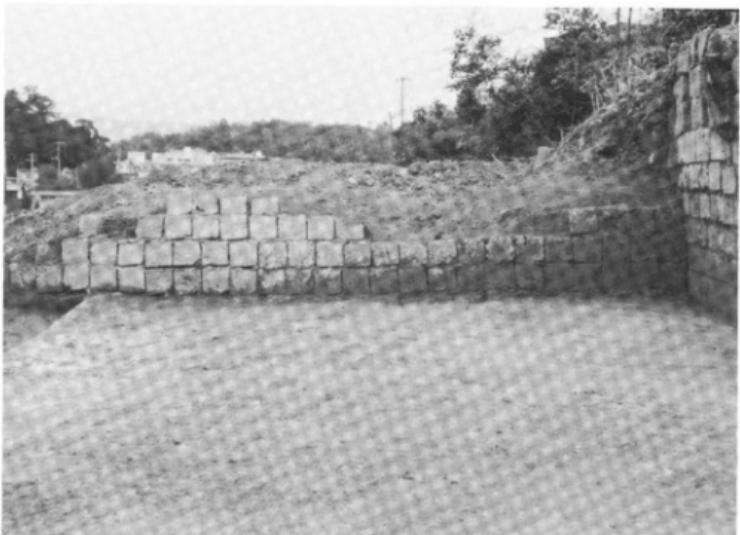
第6 焼成室障壁及び分焰柱、中央部 2



第6 焼成室障壁及び分焰柱、北端部



第6 焼成室南障壁部



第6焼成室北障壁部



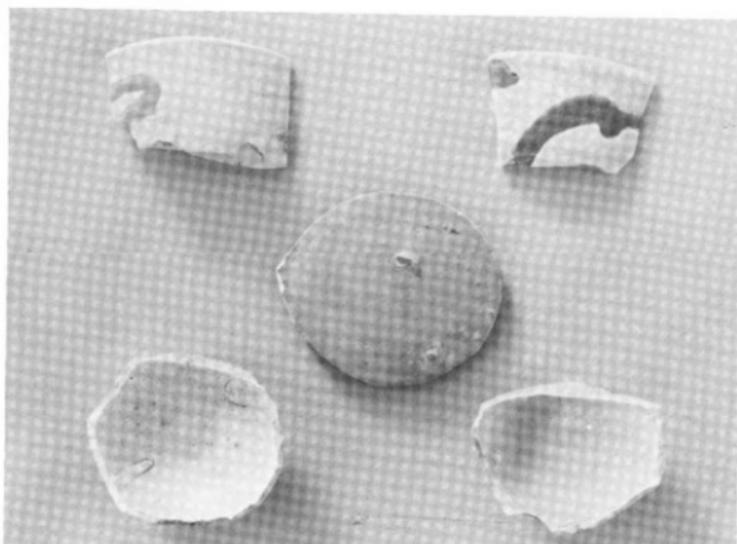
第6焼成室ブロック付着の磁器片



1. 出土遺物 (茶わん類)



2. 出土遺物 (皿類)



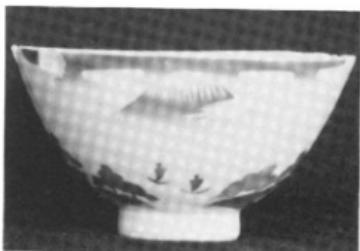
磁器茶わん 3.色釉かけ（未完）中央は湯呑蓋



4.吳須山水絵



5.吳須窓絵



6.吳須山水絵



7.吳須柳絵

磁器茶わん



8. 吳須牡丹絵



9. 吳須銘入和氣龜亭



10. 緑 絵



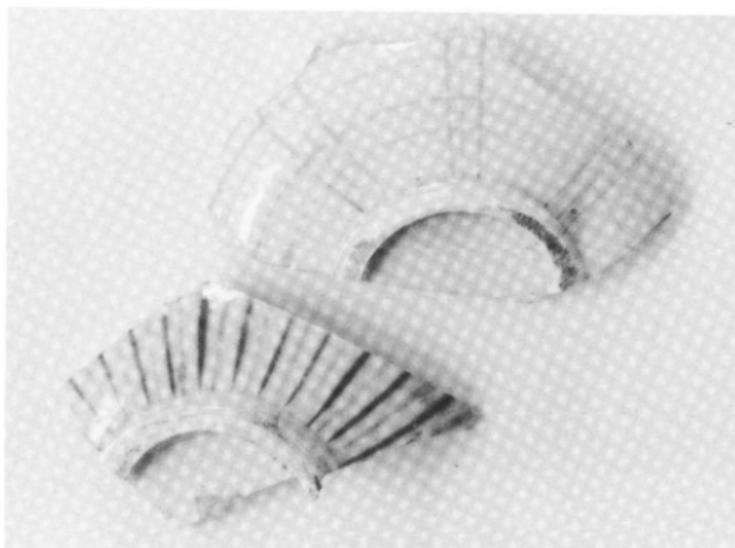
11. 薄橙赤、金彩



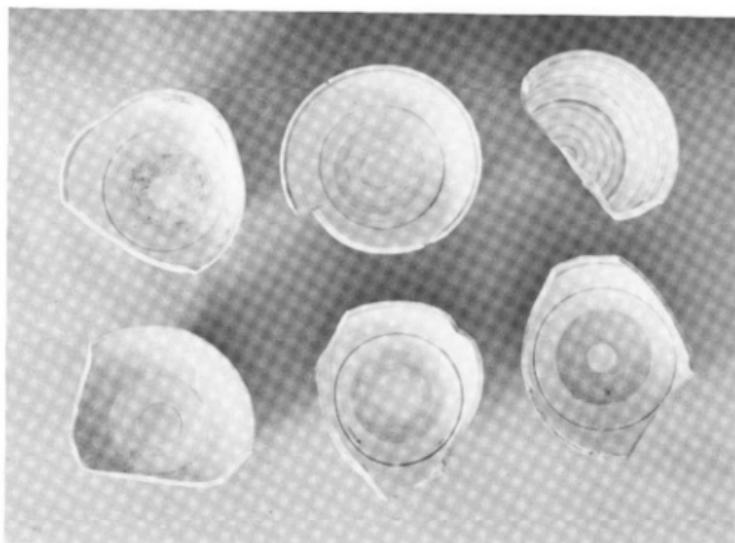
12. 茶半円かけ下部面とり



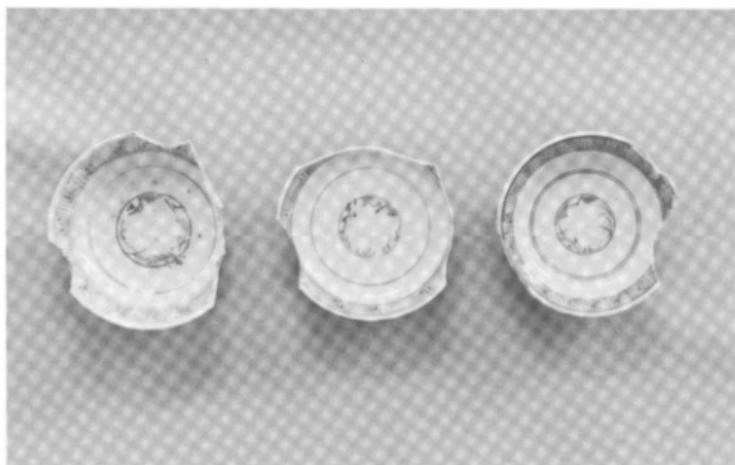
12. 黒の汁碗



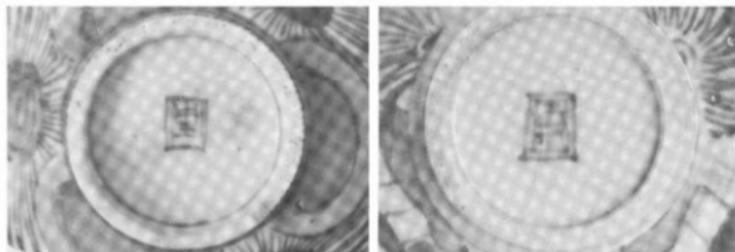
14. 線画 茶青 赤青格子



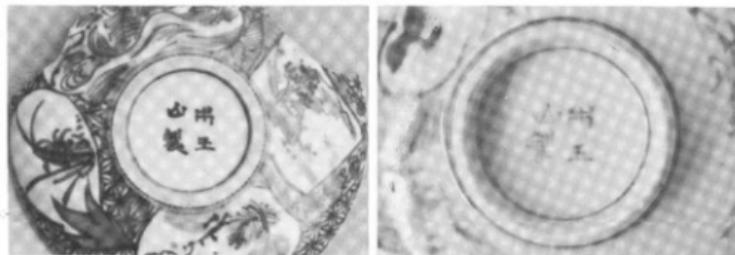
15. 蟻抜き茶碗、右上奥須輪入れ

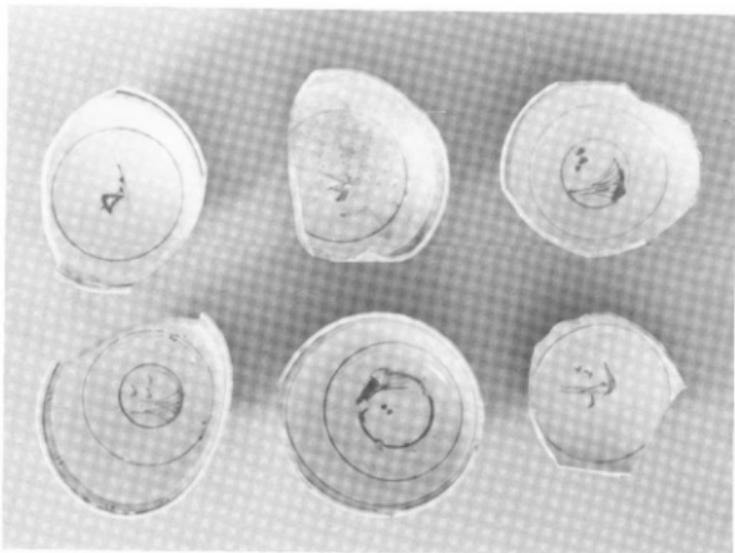


16. 茶碗蓋の内側飾り

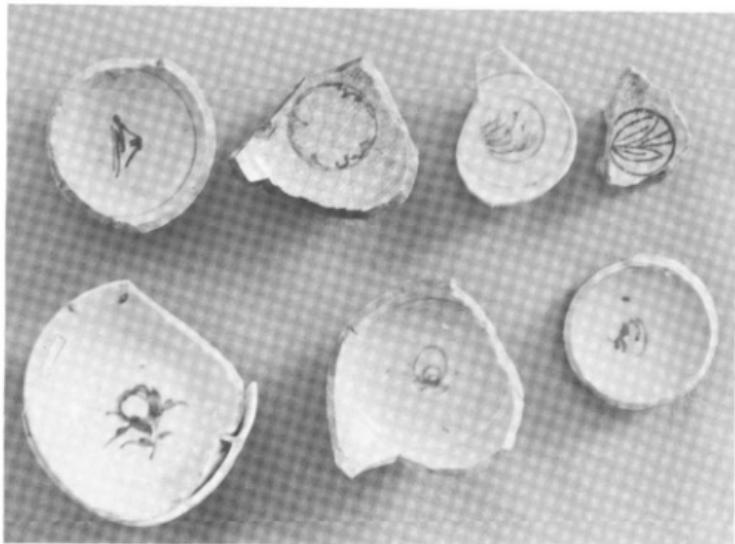


17. 市王山銘四態

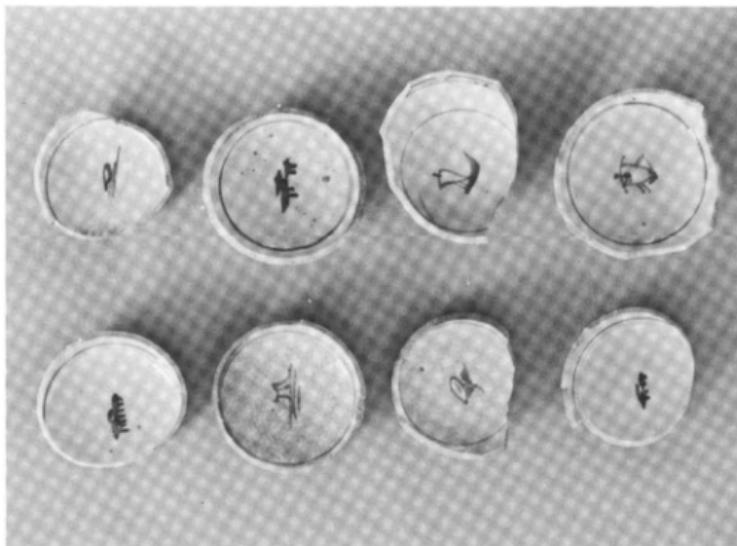




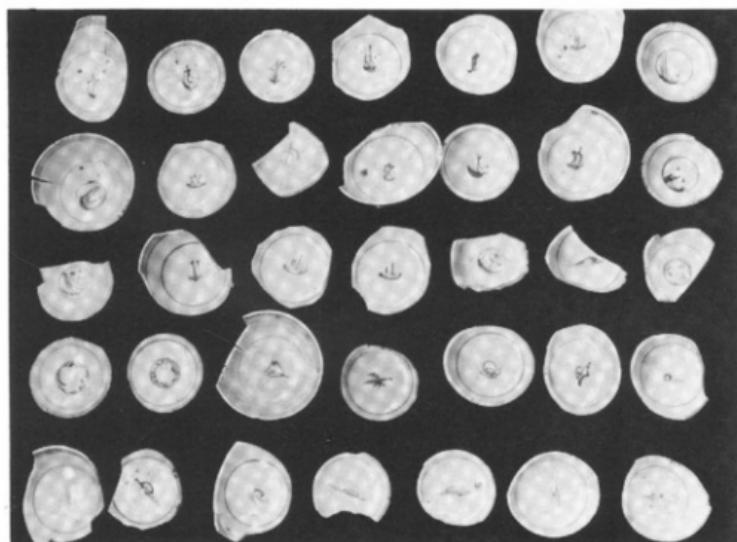
18. 茶碗中飾り 1



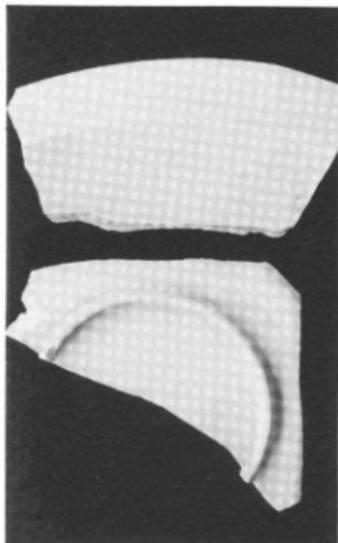
19. 茶碗中飾り 2



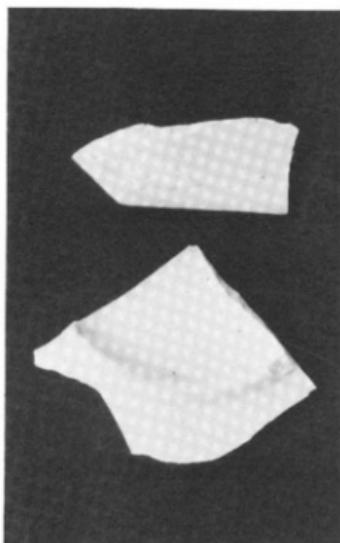
20. 茶碗中飾 3



21. 茶碗中飾 4



22. 大皿無地



23. 大皿、八角皿無地



24. 大皿有田風波形のフチ